

第一朗読（使徒言行録2章14・22―32節）

14 すると、ペトロは十一人と共に立つて、声を張り上げ、話し始めた。「ユダヤの方々、またエルサレムに住むすべての人たち、知っていただきたいことがあります。わたしの言葉に耳を傾けてください。」

22 イスラエルの人たち、これから話すことを聞いてください。ナザレの人イエスこそ、神から遣わされた方です。神は、イエスを通してあなたがたの間で行われた奇跡と、不思議な業と、しるしとによって、そのことをあなたがたに証明なさいました。あなたがた自身が既に知っているとおりです。23 このイエスを神は、お定めになった計画により、あらかじめご存じのうえで、あなたがたに引き渡されたのですが、あなたがたは律法を知らない者たちの手を借りて、十字架につけて殺してしまつたのです。24 しかし、神はこのイエスを死の苦しみから解放して、復活させられました。イエスが死に支配されたままでおられるなどということは、ありえなかつたからです。25 ダビデは、イエスについてこう言っています。

『わたしは、いつも目の前に主を見ていた。』

主がわたしの右におられるので、わたしは決して動揺しない。

26 だから、わたしの心は楽しみ、舌は喜びたええる。

体も希望のうちに生きるであらう。

27 あなたは、わたしの魂を陰府に捨てておかず、

あなたの聖なる者を朽ち果てるままにしておかない。

28 あなたは、命に至る道をわたしに示し、

御前にいるわたしを喜びで満たしてください。」

29 兄弟たち、先祖ダビデについては、彼は死んで葬られ、その墓は今でもわたしたちのところにあり、はつきり言えます。30 ダビデは預言者だっ

たので、彼から生まれる子孫の一人をその王座に着かせると、神がはつきり誓ってくださいたことを知っていました。31 そして、キリストの復活について前もって知り、

『彼は陰府に捨てておかれず、その体は朽ち果てることがない』と語りました。32 神はこのイエスを復活させられたのです。わたしたちは皆、そのことの証人です。

福音（マタイ28章8―15節）

8 婦人たちは、恐れながらも大いに喜び、急いで墓を立ち去り、弟子たちちに知らせるために走って行つた。9 すると、イエスが行く手に立っていて、「おはよう」と言われたので、婦人たちは近寄り、イエスの足を抱き、その前にひれ伏した。10 イエスは言われた。「恐れることはない。行つて、わたしの兄弟たちにガリラヤへ行くように言いなさい。そこでわたしに会うことになる。」

11 婦人たちが行き着かないうちに、数人の番兵は都に帰り、この出来事をすべて祭司長たちに報告した。12 そこで、祭司長たちは長老たちと集まって相談し、兵士たちに多額の金を与えて、13 言つた。『弟子たちが夜中にやって来て、我々の寝ている間に死体を盗んで行つた』と言いなさい。14 もしこのことが総督の耳に入つても、うまく総督を説得して、あなたがたには心配をかけないようにしよう。」15 兵士たちは金を受け取つて、教えられたとおりにした。この話は、今日に至るまでユダヤ人の間に広まっている。

朗読から祈りへ

—初めの信仰—

聖霊に満たされたペトロは「声を張り上げて」話し始める。このペトロの説教には大切な二つのケリユグマが含まれている。それを読むことで、初めの時代の教会が何を伝え、何を信じていたかを知ることができる。

司祭は毎週主日の福音朗読の後、説教をする。その日の典礼で読まれる聖書の言葉を何度も読み返し、黙想し、聖霊の助けを願いながら沈黙の祈りの中で、主が何を語られているのかを探す。聞こえない、見えないことが多い。ときとして、へたなことを言うより、聖書のテキストそのものをもう一度読んだ方が伝わるのではないかと思うことがある。

今日の第一朗読も福音も自分の言葉に置き換えないで、そのままもう一度読みたい気がする。聖霊来てください、と祈りながらそのままもう一度読んでみるのである。ペトロのように「声を張り上げて」、「知っていたきたいことがある」と本気で、「わたしの言葉に耳を傾けてください」とここから願ってもう一度読むのである。

聖書のテキストを読んで改めて思う。この言葉は神の靈感によって書き留められ、伝えられたものだ。そうであるならばどんな司祭の言葉よりも力があるものだ。説教をする司祭は自分がいいことを言うのではなく、聖霊によって再び語るのだからではない。大それたことである。しかし、そうでなければ救いをもたらす「神の言葉」は伝わらない。

このペトロの説教を読むたびに思う。このテキストは声を出して読まなければならない、肉声で聞かなければならないと。声を出して読むとき、発せられた肉声を聞くとき、その言葉に神の力である聖霊が乗る。その言葉が耳とところに響くとき、聖霊が全身を満たす。「ペトロの言葉を受け入れた人々は洗礼を受け、その日に三千人ほどが仲間に加わった」（使二四）ということもわかる気がする。

救いは知恵や理屈ではなく「聞く」ことで始まると思う。

—わたしのガリラヤ—

神の言葉は今も生きている。聖書に記されている「出来事」は単に二千年前に書き留め

られたことではない。書き留められたこと自体、伝えられたものである。かつての「出来事」は一回かぎりのことではない。「起こっていること」がずっと伝えられているのである。

墓に行った婦人たちとイエスの出会い。この聖書の話も、先のペトロの説教のように声を出して、そのまま何度も読んでみたい。「大いに喜び…急いで…走って…」。「おはよう」というイエスのあいさつ。「恐れるな」というイエスの言葉。声を出して読むと臨場感がある。今、ここで起こっていることのように見えてくる。

復活したイエスにどこで会えるのか。イエスは婦人たちに言う。「行つて、わたしの兄弟たちにガリラヤへ行くように言いなさい。そこでわたしに会うことになる。」

ガリラヤはかつて弟子たちが生活をしていたところ。ある日イエスと会い、イエスに声を掛けられ、わからないままにイエスに従いついていった所。そこへ戻るようにイエスは言う。ガリラヤはこれからは復活したイエスとの出会いの場になる。日常が非日常に変わる。神など見えなかった日常が、神との新しい出会いの中で生きる非日常に変わる。今、わたしが生きているこの場、この時が「わたしのガリラヤ」であることに気づく。(M・M・Y)